

## 室生犀星の昭和十二年前後

——小説『大陸の琴』を中心に——

永吉雅夫

室生犀星は昭和十二年（一九三七）四月、「満州」を旅した。その紀行は随筆集『駱駝行』（昭和十二年九月）にまとめられたが、その裏表紙に記された自筆の旅程によれば、十九日、神戸から吉林丸に乗船し、二十三日、大連に上陸、旅順を見たのち、満鉄の特急「あじあ」に乗って「奉天」そして「哈爾濱」まで行った。<sup>(注一)</sup> 哈爾濱に着いたのは二十五日、そこで二十九日の出立まで四泊したので、この旅行中いちばんゆっくり滞在した都市が哈爾濱である。その後、奉天まで戻って、「朝鮮安東県」に入り「京城」、そして釜山から船に乗って下関に上陸、京都で二泊した後、ようやく五月七日に帰京する。旅行嫌いを自認する犀星にとって、これは今ふうには生漕ただ一度の海外旅行であり、当時の状況のなかでは昭

和七年（一九三二）に建国されたばかりの「満州国」および大日本帝国支配下の「朝鮮」という「外地」への旅行であった。

その昭和十二年は、日本の近代史においては、とりわけ七月七日、北京郊外の盧溝橋における日中両軍の衝突に端を発する、いわゆる日中戦争の始まりの年として銘記されるであろう。前年の二月二十六日には、いわゆる二・二六事件が起こり、それに関与した民間人として北一輝や西田税らの死刑が執行されたのも、昭和十二年八月十九日のことである。

犀星は、自身にとってのその一年を振り返って書いている。

昨年（注二）は殆ど「大陸の琴」一篇を書くために長途の旅に出て、爾来、その仕事に没頭して忽乎として暮れたのである。百数十枚の旅行記と十数篇の詩と、そして小説「大陸の琴」が重なる作品であった。<sup>(注三)</sup>

ここに挙げられている犀星昭和十二年の文業について、時代状況と犀星個人史との関連のなかで検討することが、本稿の目的である。

(一)

犀星昭和十二年の文業を見るにあたって、まず最初にふれておきたいのは、当時流行の「あゝそれなのに」という歌謡のことである。「あゝそれなのに」は作詞星野貞志、作曲古賀政男、歌美ち奴で、テイチャク・レコードから昭和十一年十一月に発売された。

1 空にゃ今日もアドバルーン

さぞかし会社で今頃は

おいそがしいと思うたに

あゝ それなのに それなのに

ねえ おこるのは おこるのは

あたりまえでしょう

2 どこで何しているかしら

何か悲しい日暮どき

想うは貴方のことばかり

あゝ それなのに それなのに

ねえ おこるのは おこるのは

あたりまえでしょう

3 ひとり出ているお月様

窓で見ているこのわたし  
とぎれとぎれの針仕事

あゝ それなのに それなのに

ねえ おこるのは おこるのは

あたりまえでしょう

4 夜更けに聞える足の音

耳をすませば胸が鳴る

帰って来たかと立ち上がる

あゝ それなのに それなのに

ねえ おこるのは おこるのは

あたりまえでしょう

これは、会社勤めの夫が出勤して深夜に帰宅するまで、その身を案じて家庭にいる妻の、ある裏切られた感じを深刻にはなく、コミカルに表現した歌詞と違っていいだろう。作詞者の星野貞志とは、詩人サトウ・ハチローの別名だという。ある裏切られた感じ、すなわち「あゝ、それなのに それなのに」という、自身の献身が空回りするしかないような夫の能天気に対して、「おこるのはあたりまえでしょう」と責めてはいるが、責めるといつても、この「ねえ」で始まる口吻は、当の夫によりはむ

しろ、まわりの誰彼にむけて承認を求めめる趣で、それは  
むしろ離別による家庭の崩壊を招くような深刻さを帯び  
ているわけではない。だから、ある種の痴話として、む  
しろ、ここには婚姻で結びついた男女によるサラリーマ  
ン家庭の幸福が、裏返しに歌われていると言ってもいい  
かもしれないくらいである。それを浅草の売れっ子芸妓  
であった美ち奴が、透明なような、拗ねたような高い声  
で、投げ出すように歌ったのである。レコード発売後、  
爆発的な流行を見せて、五十万枚以上がまたたく間に売  
れたというスピード記録を示したらしい。<sup>(注三)</sup>

犀星は、この旅行中、

朝鮮は京城はおろか安東でも釜山でも、そして哈爾濱  
のすみずみの酒場やカフェでも、例の「ああそれなの  
に」がうたはれてゐるのに、私はうんざりして慄毛を  
ふるはざるを得なかった

として、わざわざ「「ああそれなのに」<sup>(注四)</sup>なる一文をも  
して、この流行歌について筆を費やしているのである。  
それは「流行歌といふものは何かその時代に相応はしい  
厭らしい一面を代表してゐるものである」と考えるから

だが、だからこそ「私はこの「ああそれなのに」が厭で  
ならなかった」と述べるとき、この流行歌のどこに、犀  
星はどんな「何かその時代に相応はしい厭らしい一面」  
を感じ取っていたのだろうか。

犀星に師事した伊藤信吉は、その当時、自分も世間の  
「皆さん並みに口誦さんでいた」この「あ、それなの  
に」について、「ふくらみがあつて、柔らかくて、口あ  
たりのいいメロデー」と述べたうえで、「犀星はなぜ  
嫌った？」と問うて、「粘っこい、しなだれかかるよう  
な歌い方、そういう通俗性が嫌だったらしい」と推測し  
ている。<sup>(注五)</sup>あるいは犀星自身がそんなふうに語ったことが  
あつたのかもしれない。ただ、伊藤は「メロデー」と  
「歌い方」にのみふれて、歌の内容たる歌詞そのものに  
ついては言及しない。

犀星のこの一文は、じつは、今次の旅行中、至る所で  
聞くはめになつた「ああそれなのに」という「この小唄  
をうたつてゐた」「哈爾濱の女給さん」をはじめとする  
「これらの奥地に働く女達」、すなわち内地を遠く離れ  
て働く「女給」「ダンサー」「藝妓」それぞれの就業実態  
報告とでもいうべきものである。犀星は「(今年二  
月の調査)」とか「(昨年中の調査)」などと注記しなが

ら、経済面から見た彼女たちの実態を記している。

「哈爾濱の女給さん」は「七百九十名くらゐ居て月に三十八圓くらゐ」稼ぎ、うち「七百四十五名」には「前借」が「五千九百六十圓、一人當り八圓」あり、その出身は「大抵、京都、長崎、門司あたり」である。また、「ダンサーは百六十名ゐて月に六十二圓平均の稼ぎ」で、うち「百五名に對して前借八千二百九十五圓、一人當り七十九圓」と、前借が「女給の十倍」の額に達する。それに対して「藝妓は二百八十一名に對して月一人あたり二百四十五圓くらゐ」稼ぐが、「前借三十萬二千圓、百六十五名に對して一人當り千八百三十二圓といふ傳統的な身動きのできない数をあらはしてゐる」と報告するのである。最後に、哈爾濱の夜の歓楽街の経済規模がどの程度であるのか、「總じて一さいの料亭からカフェに振り撒かれるチップは月あたり三萬二千圓、日割で約千圓くらゐに當つてゐた」と、いかにも現地での実地調査を思わせる記述もある。そして、曰く、

これらの奥地に働く女達は特に何等の「稼ぎ」があがる譯でもなく、また特にその後身を引立たせるやうな目にあふ譯でもない、ただ若い身そらを零度下二三十

度のところ、**「ああそれなのに」**を唄つて、ちよつとした良い靴をはける程度である

と。

犀星は接客を生業とする女性たちの職種ごとにその人数、月あたりの稼ぎと前借の額を記して、「何等の徹底的な仕事ではなくふらふらした中途半端な仕事である」度合いに反比例して、その「稼ぎ」に大きな差が生じる一方、内地を遠く離れた「これらの奥地」にあつても内地同様のその職種特有の「前借」体質が持ち込まれてゐることを、数字として示して見せたのである。それは犀星に、「その職業苦が職業苦にならないで肉體苦に變つてゐる」ことを感じさせる「調査」の結果であつた。そして、そんな彼女たちが誰も彼も「ああそれなのに」を唄つてゐるのである。

それであるのに、彼女らは美しい若い身そらを賭けてでもゐるやうに、冗らない小唄と音楽のなかに、「ああそれなのに」をうたつてゐるのである。これはどうにも仕様のない、そして救ひやうのない小唄を地で行つたやうなものである。

伊藤は「通俗性」という語で片づけてしまっていたが、犀星は、なにか一生懸命とか切実なものが感じられない、むしろそうしたひたむきさを自堕落にずらし、まう「小唄」が気に障ったのではないか。この文章では、「小唄」は歌詞のことである。結婚して家庭にいる妻が「ああそれなのに」と言い、「おこるのもあたりまえでしょう」と同意を求める事態の、いわば原因人物と目される当の彼女たちが、その文句を唄って、まさに帰りを待ちわびられている男たちを接客するというありよう。

その転倒した構図の戯画性は、この際、関係あるまい。それより、詩人犀星の耳は、その全体の中からわけても「ああそれなのに」の一句に傾けられているようである。「美しい若い身を賭けて」いるならまだしも、そうでもないのにまるで「賭けてでもあるやうに」「ああそれなのに」と歌うことで、むしろそんな真剣さをごまかしてしまふ自堕落、あるいは「ああそれなのに」と言うに相応しい自身の営みはないのに、「ああそれなのに」と歌うことで、あたかもこの現実はやむを得ないものとして受け止めてゆく、しだらない現実承認の連鎖的進行。犀星が漠然と感じていた「何かその時代に相応はし

い厭らしい一面」を、「ああそれなのに」は意識化させたのである。

## (二)

だから、犀星は「あ、それなのに」の流行の、突然の終わりにについても述べることを忘れない。『新潮』昭和十三年（一九三八）七月号に発表された「文学は文学の戦場に」と題するエッセイである。

去年の春まで門司や下関や満州の果に行つても、ああそれなのにそれなのにを聞かざるを得なかつたものが、それこそ誰一人として唄ふ者があなくなつた

と記し、

誰が何と言つてもこの厭らしい流行唄を退治することが出来なかつたものが、一瞬にして廃められたのである<sup>(注六)</sup>

と言う。

あれほどの流行を「一瞬にして」終わらせ、以後、「誰一人として唄ふ者があなくなつた」とは、いったい

何があったというのか。文章の勇ましい題目そのままに、冒頭の一文は述べている、「戦争前にひと頼りはやつてゐた流行歌が、戦争と同時にびつたり歌んで了つた」とすなわち、昭和十二年七月七日の盧溝橋事件以来の「戦争」の開始が、「あ、それなのに」の流行の息の根を止めた。のみならず、「一さいの流行唄といふものはやらなくなり」、かわりに「俄然として日本ぢゆうが澎湃たる軍歌で湧き上つた」のである。

実際、たとえば昭和十二年七月三十一日、東京日日新聞と大阪毎日新聞が合同で、軍歌「進軍の歌」の懸賞募集を行うや、募集期間「一週間」にもかかわらず「応募総数実に二万五千余に達し」た。そして、なかから「本多信壽作詞」を当選歌として陸軍戸山学校音楽隊による作曲で「進軍の歌」が全国に鳴り響くことになる。が、同時に菊池寛および北原白秋らの撰者によつてわざわざ「露営の歌」と題名されて佳作第一席となつた「藪内喜一郎作詞」歌こそ、古閑裕而作曲のメロディーにのつて「勝つてくるぞと勇ましく」の歌声を、「進軍の歌」以上の人気で、日本全国にとどろかすこととなつたのである。

そうした世相の変化を指して、犀星は次のように記し

た。

この眼覚めた心の繋り方は國民の心の底深くから自覚的にあらはれたものであつて、これほど大きい緊張はないと言つていい。

「あ、それなのに」から軍歌への交代、それを「この眼覚めた心の繋り方」ととらえたとき、犀星は「かういふ事變下にある文学者としての私の心境」、また「實際生活の上に何が私を變らせつつある」か、そして「私自身の文学がどういふ發展や變化を見せてゐる」かを「考へる」べく迫られる。「俳句と和歌」が「大衆的な形式文学」であるがゆえに「戦場にある人びとによつて物され」た「戦中朗詠」をもたらず結果、「戦争が文学的分野にその影響を最初にあたへた」ジャンルとなつたに比して、「詩人が戦争に參與してゐる数がすくないから」、詩には「戦争のためにつくられたものが少しづつ表はれてゐる」程度、そして「小説にあつては現地報告の随筆」以外「小説として見るに足るものは一つもない」というのが、犀星の「文学的分野」についての現状認識であつた。しかし、「今事變以来戦場近くに行つた文学者

は十數氏をかぞへ」、その彼らが「帰來」、一樣に口をきわめて「情痴の文学」また「軟弱なる戀愛小説」を批判し、「悉く生れ變つたごとく文学精神の女々しさをいましめ」始めるに及んで、「戦争が文学的分野にその影響」を明らかに刻印するようになってきたのを認めるのである。それは「あゝ、それなのに」から軍歌への交代と表面的には軌を一にする世相の変化でもあるが、その底でいけば空氣として圧迫してくる時勢というものの台頭を意味する。犀星は、「戦場近くに行つて具さに現地報告の文学を目ざすのが文学者として壮烈な仕事であり、何人もさうせねばならぬのであらうか」と自問する言辞を記している。実を言うと、もともと、この「文学は文学の戦場に」というエッセイ自体、編集部からの注文としては「国策と文学者の役割」というじつに端的な依頼であったのである。

しかし、担当編集者宛に五月十日付と同二十五日付の犀星の書簡が残っている。<sup>(注八)</sup>十日付書簡で、犀星は「国策と文学者の役割」は旨くかけないかも知れません。かういふ問題はニガ手です」と述べて、しかし「とにかく何かかきませう」と約束する。だが、「メ切にさいして」の二十五日付書簡では、「御迷惑でせうがどうにも舟は

うごきさうもありません」と一転して、断念を記している。

今朝四枚ばかり書いたのですがまるで気乗りがせず、書けば誰かにつつかかつて行くやうで実に危ない気がします。事実、小説は事変とは別に暢気に存在してあるし、私自身も心境に渝りなく生活してゐてそれを具さにかいて国策と我々の役割をかくことは失言の累を及ぼしさうです。某々氏らのいきり立つた見え透いたことは恥かしくて書けません。どうか、こんどだけはお許しをねがひます。

こういう書簡を背景におくと、犀星と担当編集者が空氣という時勢の圧迫のなかで、「失言の累」を避け「見え透いたこと」を書かずに、しかも当該テーマで「恥かしく」ない文章をものするために、いかに苦慮しているかがよく見えてくる。「文学は文学の戦場に」というタイトルからして、勇ましく時勢の用語を用いながら、しかし「小説は事変とは別に暢気に存在してゐる」という、じつは「文学」と「戦争」のあいだに一線を画する意図のもとに付された題名だったわけである。だから、その

エッセイには、戦場へ行つて「生れ變つたごとく」断乎たる威勢のいい言辞を弄する文学者たちに対して、「これらの言葉を耳をすまして聞き」、「私自身の文学」の問題として「深くものものしく又悲しく考へ出した」という文章もある。また時節柄、「戦場を永遠に記録するために文学者が團結してその何人かをおくるのもいい」とも書くが、しかし、犀星はすぐ続けて「だが、私はさういふがらにないことに出しやばりたくない」と述べて、そのエッセイをこんなふう<sup>に</sup>結ぶのである。

私は私の文学だけを益々深くそだてることを忘れないやうにしたい、私が生きて役に立つことはこの文学をいつくしむことだけである。

では、「私の文学」とは、どういうものなのか。どんな作品は、「私の文学」らしくないというのか。

私は先年満州に赴いた時、何等かの意味に於て日本を新しく考へ、そして國のためになるやうな小説を書きたい願ひを持つて行つたのであるが、結果に於てそんな大それた小説などは書けずに相渝らず私らしい小説

を書いて了つた。作家のたましひといふものはどういふ處にゐても、猫の目のやうに變るものではないのである。

犀星は「満州」旅行の時点では、「満州」を見ることで「日本を新しく考へ」、おそらくそのことによつて「國のためになるやうな小説を書きたい願ひ」があつたと言ふ。その期する所と、「私のこんどの旅行には或る後援から金を貰つたやうに伝へられてゐた」といふ世間の憶測とは、なにか通底するものがあるのだらう。

犀星は昭和十年七月、『あにいもうと』で第一回文芸懇話会賞を受賞するが、弟子でもあり『驢馬』同人でもあつた中野重治はわざわざ書簡を送つて受賞辞退を勧めたことがあつた。なぜなら、それは文芸統制を進めようとしていた内務省警保局の主導のもとに設けられた文芸懇話会であり、そのメンバーである元局長松本学の意図が賞の選考を左右したという事情があるからである。<sup>(注七)</sup>また、文芸懇話会との接近は翌年にはさらに進み、たぶんその延長上で、犀星は七月、軽井沢に滞在中、近衛文麿、鳩山一郎、永井柳太郎、井沢多喜男などの政治家、内務官僚をメンバーとする懇談に出席するという一日があつ



たりしたからである。

しかし、「事実は満鉄からの招待でもなければ或る後援にも據らずに私の金を持つて行つたに過ぎなかつた」<sup>(註十)</sup>と打ち明けるとおり、小説の方も書いてみれば「そんな大それた小説」どころか「相滄らず私らしい小説」になつてしまつた、というのである。

ここにいう「小説」こそ『大陸の琴』なのだから、『大陸の琴』は、経緯においてじつに微妙な位相を占める作品であつた。

この旅行の各地では、朝日新聞の関係者がなにくれとなく準備もし世話に手を尽くしたが、「新朝刊小説」『大陸の琴』の連載開始を告げる朝日新聞昭和十二年十月六日朝刊は、

舞台を楊柳立ちならぶ満州の天地にとり、新興楽土の裏と表に息づく生活の行く手を見つめた、まことに室生氏独得の取材になるもの

として、「事変の渦中にある現在、もつとも推奨し得る小説」という宣伝文を掲載した。

### (三)

さて、『大陸の琴』は朝日新聞昭和十二年十月十日(日)から十二月十日(金)まで全六十一回の連載になる。全体は「移花」「楊柳の都」「白夜」「乳房火山」「哈爾濱」の五部に分かれたれ、掲載一回分ごとに、冒頭「兄弟の帆」から大尾「続、天青地白」のようにそれぞれ題が付された。連載終了後、昭和十三(一九三八)年二月、新潮社から『大陸の琴』として、「序に代へる数唱の詩」十二篇を巻頭に置いて刊行された。<sup>(註十二)</sup>

そして、そのとき犀星は作品に大きな改訂を加えた。「乳房火山」の文字を改めて「五つの国の旗」としたことはともかくとして、ほかに、「哈爾濱」の第八にあたる「わかれ」(通算五十五回、十二月四日掲載)部分を全面的に削除すること、および最終回「続、天青地白」のあとに、さらに「氷の町」を設けて新たな一回分を書き足したのである。

この改変は、『大陸の琴』という作品を、二組の男女の関わりの物語として整理するという結果をもたらしたと言える。すなわち、新聞連載時の結末は、十年前前の「捨児」およびその母なる「満人と支那人の雑種児」の

女性のその後の消息を求めて「奉天」へやってきた兵頭鑑が、哈爾濱生まれ哈爾濱育ちの白崎藍子を伴って「日本に向って出立して行つた」というものであった。だが、犀星はその続きに「氷の町」を置き、大馬専太郎と早瀬苺子の、哈爾濱からさらに北、齐齐哈尔における愛情の確認といったんの別れを書いて小説を終わらせたのである。通算五十五回目の「わかれ」部分が全面的に削除されたのは、その回では庄屋力造の求愛を退けた苺子が「内地へ帰るつもり」と言い、しかし庄屋は振られながらもながしのお金を渡し、去り際には「處書き」まで渡して、長年の女術としての感覚から「此の女はきつとおれを訪ねて来る」と確信したように記されていて、このち苺子が庄屋力造と結びつくような展開をほめかせていると読めるからであろう。だが、庄屋力造が苺子に目をとめるその以前から、大馬と苺子はなんらかの縁故があつて苺子の入院費を大馬が世話したことは作品の初めに記されていたのである。犀星は、兵頭鑑と白崎藍子だけでなく、大馬専太郎と早瀬苺子の組み合わせについても、それなりの決着をつけなければ作品の完結とは思わなかつた、ということである。

犀星は連載にあたって寄せた「作者の言葉」<sup>第十三</sup>で、「本

篇は華麗壯嚴なる戀愛交響楽でもないし近代人情の絵巻物でもない」と述べた。神戸から大連へ向かう豪華客船吉林丸の一等船室の客として関わりを持ちはじめた兵頭鑑、白崎藍子、石上讓、宝田欣三、大馬専太郎、および三等船室に詰めこまれている庄屋力造、早瀬苺子、村山つな子と桑ちゃん、これら男女の物語は藍子を焦点とする思考の交錯を中心に、藍子の親昵から苺子を渦中に巻き込みながら展開するが、それは「戀愛交響楽」や「近代人情の絵巻物」を意識したものではないと言うのである。「文学精神の女々しさ」を言い立てる風潮に配慮するものかとも思われるが、作品を読む視角として作者が求めたのは、こういうことであつた。

もともと荒唐無稽な人生を描くべく約束された私は、満州にある都会都会の街や小路や悲しい無限の荒野のなかにぼつりぼつりと主要人物の徳義や愛憐の姿を見付け、もろともに運命的臭気を描きはじめたものが本篇なのである。

「運命的臭気」とは、いかにも犀星らしい表現かもしれない。作品では「白夜」の最終回にあたる第十四の題と

して「運命の臭気」が用いられている。哈爾濱の「孤児院ロスキイ・ドム」を去るときに、兵頭が奉天の同様の施設「我善堂」で感覚したものを思い出すように感じる場面があつて、「不図我善堂で歟いだ名状すべからざる或る臭気を感じた。それは人間の運命からしみ出るような汗とも膏とも、そして体臭とも違つた別のぶんといきなり襲うところの臭い」のことと記されている。大連に上陸した兵頭が、孤児養育施設を奉天に訪ねて、さらに哈爾濱まで行く。まさに「満州にある都会都会」、その「街や小路や悲しい無限の荒野」を十年前に棄てた子と女を探して彷徨うのであり、それは「主要人物の徳義や愛憐の姿」と言えるだろう。そんな兵頭が「妙に哀愁をおびた目つき」によつて特徴づけられているのは、それが「運命的臭気」のヴァリエーションとして、彼に刻まれた印だからであろう。

#### (四)

兵頭の捨児が行われたのは「十年前」のことで、それは確認すべき施設の台帳の日付では「千九百二十七年八月六日」、兵頭自身の記憶としては「昭和二年八月六日の夕暮」と記されている。だから、小説の現在は、犀屋

の旅行と小説執筆の時間である一九三七（昭和十二）年と同じ時間ということになる。捨児はこんなふうに行われた。

千九百二十七年の蒸し暑い、ふわふわした永い白夜がいくらか縮まつて行つた晩方、兵頭鑑は表通りの歯医者者の店先に女を待つていた。人間の歯で縛うた簾繩が黄味をふくんで暑そうに垂れていたが、その一粒ずつに顔が描かれているようで薄気味悪かった。

「からだじゅう汗になつたわ。」この髻髪少女はさういうと兵頭にしがみ付いて歎き出した。「人が出て来て持つて行つたわよ、心配ないわよ」

それから髻髪少女は一日じゅう歎き吃りながら小鳥を部屋に放し、小鳥は籠を出這入りしてなつていた。

「髻髪少女」は、兵頭の「宿から程隔たつた貧しい飲食店の娘」で、「満人と支那人の雑種児」の女性である。

彼女は、兵頭との間に生まれた「私生児」を、兵頭に指示されて「我善堂」の「捨児台」に置いて戻ってきたのである。少なくともそれが、「同行していながら」、「我善堂」の「裏門にあたるようなところ」にある「救生

門」までについては行かずに、「表通りの齒医者のお店先に」居残った兵頭の理解であった。「救生門」には「竈のようない坪ほど」「刳り抜かれ」たところがあり、「郵便局の受附のような四角な窓口があつて、恰度、そこに赤ん坊を乗けて置けばその体重でひとりで呼鈴が鳴るような仕掛」になつており、「孤児院の使備人」に「捨兒台」に赤ん坊が置かれたことを知らせるのである。

この「我善堂」は、奉天で実際に活動していた「慈善機関」のひとつ、「奉天同善堂」をモデルとしている。

「南満州鉄道株式会社 庶務部社会課 古家誠一」の手によつて、「社会課報告資料第一号」として『奉天同善堂調査報告』がまとめられている。刊記はないが、課長の手になる「序」文の日付は「昭和二年二月十五日」である。その「後編 奉天同善堂」の「三、財政状態」  
「第二部 孤苦部」「二、孤児院」の項に「救生室に通ずる私生児差入口」についての記述がある。

私生児を当院に託せんとする者は、密かに此処に來り、この差入口より小児を入れるのである。この差入口には豫め電鈴の装置があり、管理室、本部及びこの救生室との三箇所に通じてゐるので、小児を置けば小児の

体重は自然電鈴を圧するに至り、私生児の差入れありしを直ちに知らしむるを得るのである。<sup>(注十五)</sup>

また、犀星はこの「慈善院である我善堂」を「千八百八十五年左忠莊公によつて設けられた」ものと記した。『奉天同善堂調査報告』は「後編 奉天同善堂」「一、同善堂沿革」において、「清朝の光緒七年より時の將軍左忠莊公」が「牛痘局」等の機関を設立しはじめたことを「今日の同善堂の芽生であり前身」と記している。

「光緒七年」は一八八一（明治十四）年である。ちなみに、諸機関を合同して本部を「同善堂」と名乗るのは、のちの「光緒二十二年」すなわち一八九六（明治二十九年）年のことである。それを犀星が「千八百八十五年」の開設と記したのは、標記調査報告「一、同善堂沿革」のまさに冒頭部分に「同善堂に於ては昨年五月四十週年記念式を盛大に挙行した」とあるのに拠つたものである。すなわち、一九二六年の執筆時点における「昨年」だから一九二五年をそれは意味し、それが「創立四十週年」に当たるとすれば、という計算である。<sup>(注十六)</sup>

「同善堂」という名称は、慈善機関としての理念の表明でもあるし、受け入れた子どものうち「姓氏、原籍、

生年月日等」の「記録の添付なき者に對し一様に善の字を与へて之が姓となす」という實際的な対応によつても裏付けられている。たぶんそれを知りつつ、犀星がフィクションとして「我善堂」と名を改めたのは、どういう意図か。あるいは作者による兵頭艦に対する批評なのだろうか。

兵頭は、当時、「一医員として公務についていた」という。奉天には満鉄奉天医院や満州医科大学付属病院など、当時の先端的な拠点となる総合医療機関があったが、「公務」という表現からは私人としてではなく、いずれも満鉄との関係を持つこれらの医療機関での勤務を感じさせる。現在、「四十くらい」というから、当時は三十くらいの年齢である。「貧しい飲食店の娘髻髪に、私生児を抱かせていられる身分でもなかった」こと、および「満人と支那人の雑種児の彼女をもう一度混血したところの赤ん坊」についての「それ自体の劣性である上にもっと汚濁混合された肉体」という当時の政治的な、また優生学の風潮によりかかったような判断から、兵頭は髻髪の「父親」を「先ず買収」し、本人にも「よく説き伏せ」て「我善堂に病児を収容」させたのであった。「病児」だったのか。だからか、「白夜 一、嬰兒」には

「人が出て来て持つて行ったわよ、心配ないわよ」とあつた髻髪の言葉は、同「四、偽れる夕暮」では「もう心配ないわ、永く生きているわよ」に改まっていて、「それから十年の間」、兵頭の耳に彼女の「満人特有の噎ぶような声音」を響かせ続けたとされる。そして、「この当時この事件以来、気の腐るような奉天に滞まることの不利益を感じて」、兵頭は「日本に舞い戻つた」という。「奉天に滞まることの不利益」とはなんのことだろう。この両句のあいだに「髻髪親子には出来るだけの金をあたえて別れ」の文言が挟まっていることからすれば、彼らによる際限のない金の要求のことだろうか。あるいは、口外されることが奉天社会の日本人医員としての立場を危うくすることだろうか。我善堂で執拗に「日本人の子供」の存在を尋ねるものだから、兵頭は、事務員に「日本人で捨児するような人は満州にはほしくないのです」と言われてしまう。

兵頭は帰国後、「独逸」留学、二年後の「三十年に帰朝」して「兵頭医院を経営するまでに」なるが、「彼の念いからして頑固な独身を固持し、専ら貧児育成会を起して週に一度それらの療養費用を自弁しながらその仕事に當つていた」という。しかし、犀星は安易なヒューマ

ニズムに流れないどころか、シニカルでさえある。すなわち「人間はその財力の円満な時にのみ善良な資質を呼び起こすものである」と記して、つづけて「兵頭はあこれらの事件をもう一度、その後の日のことを查ぶべく今度満州に遣つて来た」と述べている。

その捨児の事実がなかったのである。いや、兵頭が想定したような捨児はなされなかったのである。兵頭は十年後、施設に託されたわが子の成長した姿、そしてあわよくばその母なる女の現在を目にすることを期待した。

それは藍子に言わせれば、「それはあなたのお道楽にすぎませんわ」、「十年後にそんな捨児さんなんか見付かるものでないことが、おわかりにならなかつたんですか」と、人間として、現実認識として「少し足りないところ」があるということになるのだが、また一方、彼女にとつてそれは「その変な正直と律儀と飛んでもない道義の観念」ゆえに「心が惹かれ」る点でもあつた。<sup>注十七</sup>

が、とにかく兵頭の指示どおりには、捨児は行われなかった。それは、「満人と支那人の雑種児の彼女」と日本人のあいだに生れた子どもが、満州の施設に託されて、成長している現在を見ることができないという現実である。金を受け取り、説得に納得して我善堂に子を託した

はずの髻髪親子は、実際には、兵頭からその生れた子を奪い、隠したのであり、髻髪親子が納得したというのは兵頭の側の思い込みであつたということである。その思い込みに従つて苦しみもし、十年後に施設を訪ねた結果、事実上直面して、「彼等親子はあの日の夕暮に謀し合わせた上で何等かのからくりを以つて、赤ん坊は我善堂には捨てなかつたのではなからうか」と今さら思案するほかなかく、「何が真実であるか、何が虚偽であるかすら分らないのだ」と裏切られた思いに呆然とするとしても、それらのすべてが結局は、空回りした兵頭の思惑、すなわち兵頭の独りよがりではない。

が、兵頭は、その主観としては「満人と支那人」に裏切られた日本人の役回りにある。すなわち自分が想像することもしなかつた「満人と支那人」による自己決定を、十年後に突きつけられて途方にくれている日本人である。これを現実政治の文脈に差し戻して翻訳する必要があるだろう。兵頭鑑という名づけが何によるのか知る由もないが、そのいささかすわりの悪い感のある名前が、時節柄、兵の先頭に立つ鑑とでもいうようなつまらぬダジャレを連想させかねないとしたら、そういう名前の人物に託して表現された内実はずいぶんと皮肉なものと言

わざるを得ない。

(五)

「満州国」が表面的な建前としてではあれ、「五族協和」をその国家イデオロギーとしたことは、この作品に「混血」という形の民族の交流を地模様とするという特色をもたらしした。物語の展開それ自体は、大連へ向かう吉林丸に乗り合わせた日本人どうしの関わりのなかに進んでゆくが、兵頭の思念と行動の焦点に「満人と支那人の雑種児の彼女」との「混血」の捨児があつたことは、すでに見たとおりである。加えて、兵頭自身、「僕のからだには医学的には満人の血がまじっているんですよ」と、いきなり白崎藍子にむかつて口走る。「これだけでは意味をなさないので」と自ら付け加えるように、これは前後の脈絡も背景の説明もなしに言い出されるのだが、藍子に説明を迫られ、結局、十年前の捨児という過去を打明けるといふ展開をたどるなかで、「いまも、僕の肉体にはそういう厭らしい話のもとがあるかも知れない」といふこと」と言い直されており、髻髪少女との関係をおぼえていようである。「医学博士」のことばとしては理解しにくい発言ではあるが、民族間の血の混濁

についてのある意識を示している。べつに、同様、接触による唾液の混濁が人間の組成変化をもたらしようと言われるのも、屎星のある独特の捉え方を示すようである。

そして、その白崎藍子という女性がまた、日露の混血という相のもとに眺められている。いったいに藍子についてはその出自や生活ぶりに、たがいに矛盾するような曖昧な描写が意識的に重ねられているが、大馬専太郎の目には藍子の父親はロシア人ではないかと思えた。「失礼ですが、お父様がおちがいにいけませんか」と言いかみつつも問うた大馬に対して、藍子は「父は日本人ですわ」と断言するものの、「何故隠されるのです」とさらに言われると、藍子は「仮りにわたくしの父がちがつたつて」と言い、「わたくしの父が露西亜人だとも仰りたいんですか」と続けて、「何故わたくしの戸籍までごぞんじですの」と自ら語るに落ちるかのような話の運びになつてゐる。実際、冒頭部分では、兵頭も初対面の「藍子の皮膚の色にも、白癩のような奇妙な美しさ」を認めて、日本人ばなれのした白い肌への注目を示していた。が一方、「哈爾濱には二十年も住んでいる」といふ宝田欣三は、「お父様という方は恩給生活者でありお母様という人も手固い方」と、その見知りの観察を

述べていて、ここには人種的関心が示されておらず、ということ、大馬の推測は見当違いなのかとも見える。

藍子は「哈爾濱に生れて其処だけで育ったような娘」なのだが、宝田によれば、「哈爾濱に二十年くらいは住んでいる家庭の方」で「お見かけしてからも十五年くらいになり、「事変の時には」すなわち満州事変の昭和六（一九三二）年の時点では「まだこればかりのお嬢さん」だったと言われている。

この作品において「二十年」前は、一九一七年ということになる。ロシア革命がおこり、翌一八年八月にはいわゆるシベリア出兵により日本軍が哈爾濱を、その後二十二年まで占拠するという時期である。こうした出来事が哈爾濱に何をもたらしたか。いわゆる白系ロシア人の大量流入と日本人の増加である。哈爾濱の人口は、ロシア革命前の一九一四年にはロシア人三四一一五、日本人六九七であったが、一九二〇年にはロシア人一三二〇七三、日本人三七五九へと、それぞれ四五倍の増加を見せている。<sup>(注十五)</sup> また、べつの統計によれば、一九一七年時点での哈爾濱の日本人人口は二二八七で、五年前の一九一二年のそれは一〇八四である。<sup>(注十九)</sup> この二つの統計をつきあわせれば、一九一二年から一九一四年にかけて日本人人口

の減少があることになるが、塚瀬は同書で、同時期すなわち「第一次大戦前にハルビンを訪れた日本人」が、「一〇〇〇人ほどいる日本人のうち売春婦が三〇〇人以上もいる」こと、また「人間らしい者と言えば、領事館員と三井物産の支店員、其他少数の人間」に過ぎないと述べていることを紹介している。哈爾濱に日本の領事館が開設されたのは、日露戦争後の明治四〇（一九〇七）年二月である。

藍子の父が「恩給生活者」だとすると、大正十二（一九二三）年に制定された恩給法に照らして、退職した公務員もしくは軍人軍属ということになる。そして、その母についてわざわざ「手固い方」と記しているのは、およそ「二十年」以前の哈爾濱在住日本人女性についての上記のような事情の反映であろう。具体的には、石上讓に「叔母様」と呼ばせることで、藍子の母が「藍子の親戚でも何度か或る長官の職に就いたことのある男」の妹であるという設定をしている。そういう女性の結婚相手ならば、「領事館員」等の公務員や満鉄社員ということかもしれない。

にもかかわらず、犀星は、大馬の視線を通じて、藍子に日露の混血の可能性という雰囲気をもとわせた。兵頭



の視線も同じことである。それは亡命の白系ロシア人とハル濱まで流れてきた日本人女性の結びつきという連想を排除しない方向である。そして、その方が藍子の現在について理解しやすいというような情報が書き込まれてゆく。

藍子の両親について述べた宝田欣三は、「傀儡女郎屋の宝田先生」と女衞の庄屋力造に呼ばれるとおり、露西亜人女性を抱えたハル濱の娼館経営者であるが、実際に「藍子さんはそういう家庭に不似合いな贅沢をしていられる」として、その「商売柄」の観察眼にかけて「あの方からだ付にはすでに永く男と同棲したことのある、もの馴れたこなしがあつて」、「誰かがおそらく藍子を見て遣つているに違いありません」と断言する。その「誰か」は、「麴洋行主人」の麴大三だつたのだが、麴は藍子に「君は一体何人男を持てばいいんだ」と言い、「男を代えてあそぶ奴」と呼んで、「兵頭鑑、大馬専太郎、庄屋という奴、それから石上という小僧なぞの唾も、お前に何時かは雑つて行くんだ」と感情にまかせて罵る。確かに藍子は吉林丸に乗り合わせたこれらの人物の関心の的で、それは「笑うとその顔に微妙な勾配が出来てその勾配の美しさ」に印象づけられる美貌と、ハル濱生

まれハル濱育ちの藍子みずから言うところの「此方の野蠻でそのくせ落着いた広々とした生活」が育んだ気風や振舞いに由来するだろう。藍子は「わたくしお行儀が悪いものですからお茶や生花や、それから妙に白々しい陰險な交際がいやなんでございますの」と、「内地に行くことをいやがつて」いる理由を述べている。そんな藍子の行状は、まともに相手にしてもらえないうえに麴の存在を知つた石上譲のような青年からは「保護者（パトロ<sup>ン</sup>）」に寄生する「蛆」、「淫売」呼ばわりを受けることになる。実際、藍子にとつては「永い間、身の廻りから一さい細かく気をつかつてくれた麴大三！」なのだ。「藍子だつて恥かしさを知らない淫売同様な女さ。お高く澄ましているけれど麴大三との関係はどうなんだ。言えたらみんなの前で言つて見ろ、接吻だけだなんて言い廻しは先に断つて置く<sup>(注十)</sup>」。

が、藍子自身は、ようやくハル濱の藍子の洋館を訪ねて、久しぶりの再会を果たした兵頭が「あなたはご主人のあるご身分じゃないんですか」と問うのに対して、こんなふう<sup>(注十一)</sup>に答える。

主人といえは主人ですけれど、それほど迄に進んでい

なかったでございますわ、感情の上ではわたくしを苦しめる権利は持っていたんですけれど、ごめんあそばせ、こういう言葉づかいをして、——つまり、からだの上ではそれほどの権利を主張できなかった方なんですわ。

あるいは、具体的に麴の名前を出した兵頭に、「あの方はいつも愛情を物質の形で現わしていらつたのですが、わたくしも彼の方がそうなることを平気でお受けしていました。そうなさりながら彼の方はわたくしをじつと狙っていらつしたんです。」と答えるものだから、兵頭が「ホテルで一緒にお泊りになっていたじゃありませんか」とさらに踏み込んで尋ねると、「それは能く泊つたことがございますけれど、単に泊つただけでその他のことは何もございませんでしたわ」として、二人の関係をこんなふうの説明する。

あの方は非常に嫉妬深くてそのために何もおできにならなかつたのですわ。だから、わたくし時々お妾や淫売だったとお思ひになつたらいいじゃございませんかと申しましたけれど、こういう言葉をつかうわたくし

をその儘おとりになつていて、一人で苦しんでいらつたのです。

藍子の「こういう言葉づかい」は、作品冒頭部で「あの変挺な日本語」と批評されていたとおり、哈爾濱生まれ哈爾濱育ちという成育歴からくるリアリティーを持つと同時に、当時、文化面はまだしも、新聞をうめてるのは中国における戦線の状況を中心とする軍事関連の報道ばかりで、その紙面の一隅を占める作品であることの作者犀星としてのある種の配慮でもあつただろう。パトロンの存在を公言し、かつ肉体の純潔を宝田の職業的視線を否定して主張する女。つまり、経済的に男に支援させながら、誰の所有をも拒み、手を出させないという「高み」を保持している女性なのである。そして、そのことに、兵頭の「辛辣」で遠慮のない質問に答える態度に示されたような「不思議に開け放した」、「驚くほど自由な」「正直さ」があらわれていたような女性である。そこに兵頭は「藍子という女の玲瓏さを感じた」が、多くの男からはその驕慢を指して「淫売」呼ばわりをうけるのがふつうかも知れない。それに対して、藍子本人は「一生涯に自分は何人かの男を精神的に叩き潰したこ

と」を冷然と「思い返」すまでのことである。

そんな藍子に大馬は「惨酷な一面」を指摘して、「美しい人間だけが振る舞う無意識的なハネ方がありますよ」と言い、兵頭もまた藍子のような「気高いような美人」を見ると、「男というものは」「一度根本から屈辱して見たい野生と、それから無条件に愛敬して見たい気持ちの二つを持っているものです」と言う。しかし、そうした言葉もやはり藍子には、麴大三や石上讓や「そのほか算えきれないほどの戦い敗れて行った多くの男どもを」思い浮かべさせるだけのことであった。

兵頭は、だから、「哈爾濱に永くいらつしたら誰かにズドンと一発遣られるようなことが無いともいえません」と、麴大三との縁が切れた「この際思い切つて哈爾濱から身を引いて見る」よう藍子を誘う。

僕と内地に行つて見ませんか。哈爾濱から離れるとあなたはずつと良い人になりますよ。あなたはまだことでもありますからね。僕がいろいろ教えて上げます。

藍子の返事は「お供させていただきますわ」、そして「わたくし、たと教えていただきますわ」であり、

「一週間の後、彼等は日本に向つて出立して行つた」のである。新聞連載時は、ここで『大陸の琴』という作品は終了した。つまり、兵頭鑑は所期の目的であった十年前に自分が棄てた子を見付けることはかなわず、そのかわりに哈爾濱生まれ哈爾濱育ちの妙齡の女性を伴つて、帰つてくるのである。

新聞連載時の最終の一文における「日本に向つて」は、おそらくは地理的な概念ではないのではないか。大日本帝国の膨張はさまざまに日本の外地を生んで進行し、哈爾濱が領土主権的に国際法上どのように位置づけられているか、それは作品中に「哈爾濱では面白いことには国旗だつて五回も取替えられている」として「双鷲旗、赤旗、五色旗、青天白日旗、それに満州国旗」が藍子の言葉として列挙されるが、当時の日本人のあいだで主観的には単純に外国であつたわけではないとしたら、中心から放射状に膨張延伸してゆく大日本帝国の、北の先端から中心に向けての移動こそが「日本に向つて」の意味でなければならぬ。どこにも書いていないが、ふたりが、東京以外の土地をめざすことなど想定されてはいない。そして、兵頭が「教え」、藍子が「教えていただく」のは、中心からの距離に比例して希薄化すると見られた

のかもしれない（日本なるもの）ということになるう。

しかも、藍子は「日本人の顔の中に手の切れるような鋭い、いきなり挑み蒐るような表情の圧迫」を「東京の街衝」<sup>(注十二)</sup>で感じたし、あるいはそこで暮らしを「此方の野蛮でそのくせ落着いた広々とした生活」とは対照的な

「お茶や生花や、それから妙に白々しい陰険な古い交際」<sup>(注十二)</sup>と見た以上、東京の現実はずでに否定されているのだから、「出立」して行く先は地理的な東京であるよりは、いわば精神の東京とでも呼ばるべき形而上のものであるよりほかにはない。藍子のそうした指摘に対して、

大馬は「内地にだつて落着いた宜い生活はあるんですよ」と応えているが、その「落着いた宜い生活」こそは、盧溝橋事件以後、急速に「いきり立つた見え透いた」言辞が横行するようになった風潮とは一線を画する、「小説は事変とは別に暢気に存在してゐるし、私自身も心境に渝りなく生活してゐる」と犀星が記したところの、日常のあり方の控えめな表現なのかもしれない。

単行本『大陸の琴』は、「序に代へる数唱の詩」十二篇を巻頭にすえている。はるか後年、戦後も昭和三十二年七月になってようやく刊行された『哈爾濱詩集』にいずれも収録の詩編だが、そのときの収録順とは違って、

小説の「序に代へる」という意味で、これらの詩編はここでは旅程をたどるように並べられている。しかも、「黄海」「荒野の都」「はるびんの歌」と続く順で並べられ、途中立ち寄った他の都市を飛ばして、哈爾濱が焦点化されている。詩「荒野の都」は、「荒野の果に」「螢のごとく点燈れた」る「何といふ都なるらん」、その「われこの都を知らず」にいる都を、「われこの都を尋ねんとす」る期待感を謳う。そして、ついにその都に立った胸躍る喜びが、「はるびんの歌」にはあふれている。

きみははるびんなりしか

古き寶石のごとき艶を持てる

はるびんの都なりしか。

とつくいの姿をたもちて

荒野の果にさまよへる

きみこそは古き都はるびんなりしか。

数々の館ならぶる

きみは我が忘れもはてぬはるびんなりしか。

はるびんよ

我はけふ御身に逢はんとす。

擬人化されたことで、永の年月「忘れもはてぬ」思い人  
とついに対面をかなえた恋の歎びにひとしいこの胸躍る  
喜びの表出は、「もう若くはない」という自らの感覚を  
裏切つて詩人を襲つた「詩の微熱」がどんなものであつ  
たかをよく物語つている。次の詩「古き露西亞」では、  
哈爾濱を呼吸し始めた詩人の感覚は「古き露西亞の空気  
もかかりしか」と拡大され、

古きペテルブルグをみむために

われは伸びあがり

遠き露西亞の空気を愛せんとす

というふうには、犀星自身の若い時以来の「露西亞」文学  
の愛好、その延長上にある「露西亞」への限らない思慕  
を語ることになる。「当時はもう若くはない私は五十歳  
に近く、詩の微熱におかされる筈がないのに」、しかし  
この旅行中、「いたるところで詩のかたちをもつて、微  
熱のほとぼりのようなものを私にあたえた」<sup>（注二十三）</sup>と書いたの  
は、もはや六十八歳になった犀星であつた。

藍子は「病める蛩」にたとえられたり、ハルビンを  
「満州の京都」のような所かと尋ねる兵頭に「古い釘の

ような市街」と答えたりする。ソフィスカヤ寺院に代表  
される「ロシア正教会の聖堂特有のねぎ坊主屋根」ド  
ムが林立する市街の印象のたくみな表現である。哈爾濱<sup>（注二十四）</sup>  
生まれ哈爾濱育ちと設定された藍子が、哈爾濱を通して  
「露西亞」なるものを代表しているのは明らかだろう。  
日露の混血を言われたりもしているのである。

そういう女性を、兵頭は「まだこども」であり、これ  
から「ずっと良い人」となるために、日本へ連れて帰る  
のである。ここでも、これを現実の政治の文脈において  
翻訳するとすれば、建国後間もない満州国のありようや  
ソビエトとの政治的軍事的な対峙を言うことになるのだ  
ろうが、犀星の政治的な現実認識がどういうものであつ  
たか、私には論じる準備がない。

### （六）

そういう意味では、大馬専太郎こそ時局を色濃く反映  
して設定された人物であろう。大馬専太郎は謎の人物で  
ある。その素性をめぐつて、わざわざ「移花」に「七、  
あれかな」「八、英雄」の章が設けられているくらいで  
ある。そこでは庄屋力造が大馬のことを、「此の航路で  
はちよくちよく見かける人らしい」し「新京でも見かけ

たことがある」と言い、「よほど、満州に明るいい人らしい」としたうえで、「測量師かそれとも軍人かな」、「ひよっとすると、あれかな、あれらしいなあ」とその職業、身分を推測する。その庄屋が三等船室で目を付けた女性三人連れ、そのうちの一人早瀬母子こそ唯一、大馬が「僅た三度飲みに来て入院した母子に手術料をとどけた」という関わりを持っているのだが、それでも彼女は大馬について何も知るところなく、「鷹揚で気が良くて」「それでいてどこか怖い」という印象しかないのであった。彼女たちは、軍服を着ていないのだから軍人ではなく、「製図家か知ら」などと噂するが、結局、「あんなふうな得体の分からない人を現代では英雄というのよ」というところに落ち着く。

要するに、大馬専太郎は、いわゆる特務機関の一員というところだろう。時節柄、そんなことをあからさまに書くわけにもいくまいし、また特務機関員がそれと分かるようでは任務の遂行に差し支える。大馬はとらえどころのない茫洋とした人物でなければならぬし、一方で、藍子を感じるように「何もかも知っている」というような隙のない注意深さも、大馬の資質である。その大馬がなぜ母子の手術料を出して関わりを持ったのか、それは

明らかになれない。しかし、すでに記したとおり、新聞連載終了後の単行本化にあたって、犀星は大馬と母子の関係を、兵頭と藍子の関係に並列させるよう、作品の結末として新たに書き加えた。

兵頭と藍子が「日本へ向かつて出立」したのとは逆方向に、大馬は大日本帝国の膨張延伸する最前線へと進んでゆくことになる。「明日は斉斉哈爾に行きますが、国境あたりまで行くことになりましょう」。

書き加えられた最終章「十四、氷の町」の舞台はすでに、哈爾濱のさらにはるか北方、斉斉哈爾である。関東軍は一九三一年十一月十九日に斉斉哈爾を占領するが、陸軍中央部が承認し、政府も追認したその作戦行動は、それまでの不拡大方針の廃棄を意味した。それから六年後の十一月の斉斉哈爾の「西洋大街の明るい酒場」で大馬と母子は向きあっている。母子があとを追って、「大馬をつけて」斉斉哈爾までやって来たのだ。

きみは一口に言えば莫迦だね。

莫迦で結構ですわ。お逢いでければいいんですもの。

僕は此処にも永くないんだよ。

何処までもお供いたしますわ。

そんな約束はしていない筈じゃないか。

藍子を兵頭に託した大馬には、このとき早瀬苺子は「無教育な智慧のすくない女の色の白さは、抜け上るほどびりびりした新しい感じ」に見えていた。かたや苺子には、「嘗て藍子が男の酔顔の美しさに見惚れていた」と同じく、「大馬の寝れた、何か哀しい酔顔の蒼白さはいよいよもなく感覺的なもの」として受けとめられた。苺子は「藍子の気高さが自分がない」、「妙に品のある人は品だけでも美しくなれるもの」だと初対面の藍子に「無条件に参ったのであった」が、それゆえに彼女は「始終」「気高さや品のあこがれ」のことを考えるのであった。そして、藍子も「あなたが急に好きになって」と、苺子が「驚くひまもないくらい」たちまちのうちには彼女に「お友達」を見出した。苺子と藍子は、それぞれ境遇を異にしながらも、互に惹かれあうなにかを相手の中に即座に感じ取ったのだ。苺子は、兄惣茂吉の「大連屈指の大きな西洋料理店」という口車に乗せられて、実際には場末の「バラック建間口二間」のその店を手伝うためにやって来た女性である。東京でも同じような仕事をしていて、そして「船底の大部屋になった三等船室」

の客となつて、海を渡つて来た。そこでは、庄屋力造に率いられた大陸の各地に売られてゆく女たちも同室にいて、「女というものの生え抜きの正体をこんなにまなましく見せつけられた」と感じないわけにはいかなかった。だから、藍子とは何から何まで対照的な、社会の底辺、下方に位置づけられた階層のなかで生きてきた苺子なのである。

しかし、そんな「低み」にあつて、しかも「高み」にある藍子と共通する点が、男との関わりにおける女の生理的な矜持とでもいふべき勁さ、潔癖であろう。大馬が「妙な工合になつたものだね」と「静かな眼付で」言つたとき、「大馬の酔顔を見ながら啼いて見たい気持が深まりつつあつた」苺子は、こんなことを考える。

いろいろな仕事をし様々な男にも会つて来たのだが、ここまで綺麗によごれずに遣つて来たことがなかった。それが嬉しかった。

犀星は、昭和九年八月に「詩よ君とお別れする」を書き、「復讐の文学」を発表して以来、いわゆる市井鬼ものと呼ばれる小説世界を構築してきた。「この時期の犀

星が造形した人物たち」について、吉本隆明は「聖処女」「戦へる女」「近江子」そして「竜宮の掬児」などの作品を挙げて、「理知などはひとかけらもないが、性的な牽引力と美貌ときわだったたくましい性格をもった素性のない女たち」<sup>(注十五)</sup>と述べている。藍子や苺子が、どちらも具体的になにかに対する復讐の感情を意識しているような女性だというわけではない。しかし、男の好奇の視線の中をその思惑に流されないどころか、その上前をはねるようなしたたかさで生き抜くことによって、すなわち男を翻弄することによって、ある意味で男たちの餓鬼、俗物性を逆にあぶり出すような女性となっている。

そこに、この時期の犀星が描く女性像との共通性が見出せるだろう。藍子にしても苺子にしても、そうした犀星の「私らしい小説」のヒロインにつらなる女性なのであり、その張りつめた生き方をなだめる存在として、それぞれ兵頭があり、大馬がいるという構図になる。吉本の言葉をふたたび借りれば、「何か生理的な牽引力のようなものが、けつきよく女主人公たちの復習を挫折させる。女たちは生理的な自然にたちかえるとき復讐をわずれ安堵するのである」ということになる。

そんな苺子が純情を傾けた大馬は、しかし軍事密偵か

特務としてのその職務の性質上、普通の家庭生活に身をたたくわけにはいかない。苺子のせつない愛情の表白を目の当たりにして大馬は、「静かな眼付で騒然と煮え立った人々の歌声を耳に入れたが、何にもいわなかった」とあるが、この「騒然と煮え立った人々の歌声」こそ、状況的に犀星をいらだたせたあの「あ、それなのに」の残響だった蓋然性はきわめて高いのであり、そうだとすれば、大馬と苺子はまったく、「あ、それなのに」の夫婦の痴話の世界に背をむけた一組の男女なのである。

「君はどうしても此処にいるかね」と大馬が言うと、苺子は「どうしても！」と答える。すると、「また逢えるかどうか分からないが、これは食糧なんだよ」と、大馬は「そつと苺子に札束を渡して」、「別れを惜しむ間もなく」、「戸外の吹雪のなかに出て行」ってしまう。「せめて大馬の自動車でも見送りたい」と苺子が毛皮外套をひっかけて慌てて通りに飛び出して行くのは、大馬が帰ってくるのをここで待つことの再確認である。しかし、帰りを待つこととその緊迫した思い詰が、「あ、それなのに」のそれとはおよそ別種のものであることは言うまでもないだろう。

『大陸の琴』はこうして時世相と微妙にもつれあいな



がら成り立ったのだが、そもそもいったんは思い立った  
「日本を新しく考へ」という思念と姿勢が、その後の  
情勢のなかでどのような展開をたどることになるのか、  
それは別稿にゆずりたい。

註

- (注一) 川村湊『満州鉄道まぼろし旅行』(一九九八年九月  
文春ネスコ刊、二〇〇二年七月文春文庫)には、昭和  
十二年八月の時刻表による旅行が再現されている。そ  
れによれば、吉林丸は六七八三トン、神戸を十二時に  
出航して翌早朝、門司に着き十二時に出航のち船中  
二泊して、朝九時に大連の埠頭に接岸する。これに従  
えば、犀星の大連到着は二十一日になるが、「二十三日」  
とあるのがどういふことか、不明。また、特急「あじ  
あ」は「1日に上下線各1本だけ運行され」、「大連」  
発「10・00」、「奉天」発は「14・47」、「哈爾濱」着は  
「22・30」である。
- (注二) 「四方山話」四、今年 東京朝日新聞昭和十三  
年一月二十七日朝刊
- (注三) 塩沢実信『昭和の流行歌物語』展望社による。
- (注四) 『婦人公論』昭和十二年九月号、のち「はやりうた」  
と改題。引用は『室生犀星全集』(新潮社)第七卷所収  
本文による。p403
- (注五) 伊藤信吉『室生犀星 戦争の詩人 避戦の作家』(集  
英社) p93

- (注六) 『室生犀星全集』第七卷、p462
- (注七) 東京日日新聞および大阪毎日新聞の昭和十二年八月  
十二日、当選発表紙面
- (注八) 引用は『室生犀星文学年譜』(室生朝子、本田浩、  
星野晃一編、明治書院刊)所収本文による。p422
- (注九) 『駱駝行』二、船の初旅。『室生犀星全集』第七卷
- (注十) 注八に同じ『室生犀星文学年譜』p419
- (注十一) 注九に同じ。
- (注十二) 本稿ではテキストには講談社文芸文庫版『哈爾濱  
詩集 大陸の琴』の newer 新かな文章を用い、適宜、新  
聞紙面および『室生犀星全集』第七卷所収本文を参照  
することとする。
- (注十三) 東京朝日新聞十月六日朝刊
- (注十四) 前掲『満州鉄道まぼろし旅行』によれば、吉林丸  
の「定員は一等四十四人、二等百四十一人、三等六百  
七十二人」で、神戸大連間の料金はそれぞれ「六五、  
〇〇圓、四五、〇〇圓、一九、〇〇圓」、「食事」につ  
いては「一等は洋食、二、三等は和食を船から差上ま  
す」ということであった。
- (注十五) 『奉天同善堂調査報告』p67
- (注十六) ちなみに、犀星は「山羊の乳」(p113)によ  
る養育に言及しているが、同調査報告には見当たらない。  
あるいは、直接の見聞によるものか。ただし、一九三  
三年の『奉天同善堂要覧』(奉天同善堂)には「山羊乳」  
による養育の記載(同p19)が見られる。
- (注十七) 哈爾濱 五、古い蚕卵紙p208

(注十八) 西澤泰彦『図説「満州」都市物語』(河出書房新社)「哈爾濱案内(大正十五年版)」より。

(注十九) 塚瀬進『満州の日本人』(吉川弘文館)による。

(注二十) ちなみに、犀星は二種の表記を使い分けていて、中国社会におけるそれは「私窩子」としている。

(注二十一) 移花 二、鉦の街 p 53

(注二十二) 五つの国の旗 十一、五つの国の旗 p 181

(注二十三) 『哈爾濱詩集』冒頭の「序文並びに解説」。

(注二十四) 注十八に同じ。 p 33

(注二十五) 吉本隆明「室生犀星―因果絵図」(奥野健男編著『犀星評価の変遷』(三弥井書店)所収)

なお、用字や用語において今日では不適当なものが散見されるが、歴史的な文学作品の表現として原文のとおりとしていくことをお断りしておきたい。